

REMINISCENCES



シュブルーズー1965年

名古屋大学大学院医学系研究科 社会生命科学講座 坂本 純一

ベルサイユ宮殿のある町から少しだけ南に下ったところに、ポール・ロアイヤルというシトー派の女子修道院の遺跡がある。17世紀までは、キリスト教、特に先鋭的なイエズス会の教えに対するジャンセニスムの本拠地として、世界のカトリック教徒から尊敬を集めていた。「パンセ」で名高い数学者であるパスカルが「プロヴァンシアルの手紙」を書き、悲劇の劇作家として知られ、コルネイユと並び称せられ、「フョードル」の作者でもあるラシーヌが孤児の時代をここで過ごしたともいわれている。パリの喧騒を離れた静かなたたずまいのなかで、時から忘れられたような場所であった。

画家はこのシュブルーズの谷に程近いヴィリエ・ド・バクルという、地図で探してもなかなか見つけられない小さな村に住み、画を描いていた。母の親友で、当時フランス M 商事の社長であった S 氏の夫人に連れられて、当時15歳であった私は母親と一緒にその画家のアトリエを訪れた。

ほんの2-3年前にアルジェリアの独立戦争が終わり、フランスはその最大の植民地というよりもアフリカにあった自国領の県のひとつを失ったばかりであった。第二次世界大戦の英雄であり、第五共和制の創始者でもあった背の高い、鼻の大きな元將軍、当時の大統領は、このアフリカの拠点を失ったことで、本国に帰還を余儀なくされた「ピエ・ノワール」というアルジェリア生まれのフランス人たちによる OAS という組織にたびたび命を狙われていたが、意に介さず、先の大戦で東の隣国によって蹂躪された「偉大なるフランス」を再興するため、傍からみると強権的とも思える政策をおし進めていた。

1900年代初めから長い間フランスで過ごした画家は、世界大戦中は日本に帰国し、軍部によって国策に協力させられ、戦争を鼓舞する絵画を描いたということで、戦後は日本の画壇より非難・排斥され、耐えかねて、何番目かの妻である日本人の女性を伴って再びフランスに戻ってきていたのである。ヴィリエはどこにでもあるフランスの田舎町の常として、灰色や鉛色の重厚な石造りの家々が肩をよせあって建ち、窓辺にはリラの花の鉢などが並べられているが、人影らしい姿はどこにも見かけない。

S 婦人が画家の家の戸を叩くと婦人らしき女性がわれわれを迎えた。「レオナルド、お約束されていたお客さまよ」と奥に向かって声をかけた。画家は80歳近いはずなのに創作意欲は衰えていないようで、アトリエには独特の、乳白色の下地に繊細な細い線を用いたスケッチや油絵が飾ってあった。画家はモンパルナスの時代からトレードマークになっている両耳まで髪を垂らしたおかつぱ頭であった。S 婦人と画家の妻である「君代」婦人は、あまりにも偉大なバターナリズムの権化のような大統領のお陰でフランス人は息が詰まりそうになっていることなどと言い、この年の初めに亡くなった、同じく母国を率いて大戦を勝利に導いた、いかにも John Bull といった風貌だったイギリスの元首相のことや、アフリカのガボンで医療活動をし、やはり最近亡くなったアルザス生まれの医師であり音楽家であったノーベル賞の受賞者、さらには1年半前に敵地ともいえる南部の州に乗りこんで、オープンカーでのパレードのさなかに暗殺された若いアメリカの大統領の話などをしていた。

画家は政治にはほとんど興味がなさそうで、その

会話には加わらず、少年の私を「ジュノーム」と呼びながら、モンパルナスの「ロトンド」や「クロズリー・デ・リラ」で会った芸術家の名前をあげて、独り言のようにいろいろな物語をしていた。パブロとかジョルジとかファーストネームであげていた人々の名前が、有名なピカソでありブラックという画家であることは、後でS婦人に教えられて知った。画家はさらに彼らのミューズであった美しい女性のことも話していた。キキ・ド・モンパルナスという名のその女性は後期の印象家やフォービズムの画家に絶大な人気があったが、晩年は不幸で、亡くなったときに墓地までつきそったのはキスリングと私だけだったのだよ、と画家は言っていた。「そういえば・・・」と彼は続けた。「キリスト教徒の洗礼を受けたので、今度ランスのラルー氏が持っている土地に小さな礼拝堂を建てて、その中をフレスコ画で埋めようと思っている。それが多分自分の最後の仕事になるだろう」と80歳に近くなった画家は誰に言うともなく話をついだ。

S婦人は画家の絵を1枚購入した。1フランが72円の時代に3-4万フランぐらいであったと微かに記憶している。独特のキャンパスの白とは異なった乳白色の肌に微妙なタッチの線で縁取りされた少年ながら胸のときめくような素晴らしい裸婦の絵であった。

一面が新緑の緑で覆われたシュブルーズの谷を辞したのは間もなくである。その当時の私には画家が誰であるか、印象派の後の時代の画壇にどのような影響を与えたのかはわからなかった。特徴のある度の強い眼鏡と、男性であるのに両耳まで髪を垂らしている一見奇妙な姿が印象に残っているだけである。

帰国子女としてすぐに日本の受験戦争に巻き込まれた私は、それからの3年余りは外国での思い出や経験に封印をしていた。高校3年生のときにパリのカルティエラタンで学生たちにより5月革命がおり、瞬く間に全世界に広がり、あの偉大な大統領が辞任して故郷のジュラ地方に隠遁したのも知らず、ひたすらに勉学の遅れを取り戻そうとしていた。

私がある記事に目をとめる余裕ができたのは、1969年に大学に入学してからである。そこにはあの画家が、ジャンヌ・ダルクがシャルル8世をフランス王として戴冠させたランスの大聖堂の近くに、ノートルダム・ド・ラ・ペ(平和の聖母)という礼拝堂を完成させ、そのほとんどすぐ後に亡くなったことが記されていた。礼拝堂の土地はF-1の表彰式に使われる(シャンパンシャワーのために割られる)Mummという会社のラルー社長の持ち物だったとのことで、画家がフランスに帰化したり、キリスト教に改宗したりしたときに大きな力になってくれた人物だそうだ。画家—レオナルド・藤田嗣治はその謝礼にMumm社のロゼのシャンパンの肩に彼の描いた少女の絵の一部であった薔薇をデザインした絵を描いた。Mummのシャンパンはハンフリー・ボガードの映画「カサブランカ」やヘミングウェイの小説「日はまた昇る」でも物語の大切な一部として使われている。

それからさらに30年経って、両親と妻と一緒にランスに旅をした。ノートルダム・ド・ラ・ペには「藤田の礼拝堂(Chapelle de Foujita)」という名前がついていたが、シーズンオフであったため、内部のフレスコ画を見ることはできなかった。以前Mumm社のロゼシャンパンの瓶の肩についていた薔薇のデザイン(写真右)も既に見ることはできなくなっていたが、コルクを固定するキャップの上には未だ懐かしい藤田の薔薇の絵が残されている。



ランスに建てられた Notre Dame de la Paix (Chapelle de Foujita)。室内には藤田嗣治の描いたフレスコ画がある